

令和元年6月14日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370006

研究課題名(和文)「哲学カフェ」に関する基礎理論および「哲学カフェ」形式の授業構築に関する研究

研究課題名(英文) Research on basic theory of "Philosophy cafe" and learning method based on "Philosophy cafe"

研究代表者

五十嵐 沙千子 (IGARASHI, Sachiko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10365992

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：現在、「対話」が注目されている。例えば、対話型授業や家族の対話、労使間対話、異文化間対話などがその一例である。しかし、世間で「対話」と呼ばれているもののほとんどは実は「対話」ではない。それは単なる「会話」であったり、ディベートであったり、交渉である。では真の対話とは何か。対話はどうすれば生まれるのか。

本研究は、「真の対話」を生むツールとしての「哲学カフェ」に注目し、まず哲学カフェの背景およびその理論的構造を明らかにした上で、哲学カフェによって学校の授業がどう変わるのかを具体的・実践的に論じ、さらに近年注目を集めるオープンダイアログとの親和性に着目して、真の対話の可能性を明確に提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1) 本研究は、現存する「哲学カフェ」の理論的研究として、他に類を見ない精密かつ構造的な研究である。本研究は哲学カフェの創始者マルク・ソーテのみならず、ハーバーマス、ボームやパティユ、バフチンの対話理論を用いて哲学カフェ理論を提示した。

(2) 本研究は、岩手から鹿児島までの全国の高校で哲学カフェ形式の授業をし、全国で市民や教員を対象とした哲学カフェを行うなど、豊富かつ具体的な実践研究の裏付けを持つ実践研究である。

(3) さらに、精神疾患の新しい治療法として近年世界的な注目を集める「オープンダイアログ」と哲学カフェの親和性を明らかにし、対話の新たな可能性を提示したことも重要な成果である。

研究成果の概要(英文)：Recently, "dialogue" has been concentrated. For example, there are interactive classes based on dialogue, family's dialogue, labor-management dialogue, and intercultural dialogue. However, most things which are called "dialogues" in a general way are not "dialogue" in fact.

They are merely "conversation", debate, and negotiation. Now, What is authentic dialogue? How will dialogue be born?

In this research, we regarded "Philosophy cafe" as a tool which begets "authentic dialogue". Firstly, we investigated background and theoretical structure of Philosophy cafe. Secondly, we dwelled on how will classes of school change by Philosophy cafe. Finally, we focused on compatibility with Open dialogue which has attracted attentions and clarified possibility of authentic dialogue broadly.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：哲学カフェ 対話 ハーバーマス オープンダイアログ 対話型授業 哲学対話 バフチン ボーム

1. 研究開始当初の背景

1980年以降、対話が重要視され、様々な領域で対話による問題解決が図られるようになってきた。例えば、代表的なものでは、国際問題(紛争・経済格差・環境問題など)の対話による解決、教育における対話型授業への転換(アクティブラーニングの興隆)、企業のマネジメントの主流を対話型マネジメントが占めるようになってきたこと(U理論、ティール組織などの流行)が挙げられる。

だが、これらの「対話」は果たして対話と言えるものだろうか。また、そもそも「対話」とは何なのだろうか。

研究開始当初、対話の本質は必ずしも明らかになっていず、「会話」「ディスカッション」「ディベート」などが「対話」と混同されている状況であった。また、たとえ「対話」の定義がなされていたとしても、学校や企業など様々な文脈ごとに「対話」の把握は異なっており、それらの文脈を横断する本質的な「対話」論がなかった。

また当時、対話への希求の高まりと比例して、市民間の対話の場としての「哲学カフェ」や「哲学対話」が次第に日本でも関心を持たれ、各地で開催されたり、学校でも倫理科目の授業の一環として実施されたりするようになってきていたが、やはり「対話とは何か」という本質論を欠いたまま、「ただ人々が集まって話す」「生徒たちが身近な話題についてしゃべる」だけの「哲学カフェ」「哲学対話」に陥っていた。

これらが研究開始当初の状況である。

2. 研究の目的

こうした状況に対し、本研究は、

- (1) まず哲学的アプローチにより「対話」の本質とその構造を明確化すること
 - (2) さらに、学校教育やマネジメントなど複数領域の「対話」の用いられ方を文脈横断的に探究し、そもそも「対話」に何が期待されているのか、また「対話」で何が実現可能なのかを浮き彫りにすること
 - (3) また、その際、「対話」を生起させる場としての「哲学カフェ」を手掛かりに、「哲学カフェ」「哲学対話」の理論構造を明らかにすること
- を研究の目的として開始された。

3. 研究の方法

- (1) 哲学的アプローチにより「対話」概念を明確化するという点に関しては、ユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション論を軸に、マルティン・ブーバー、カール・ヤスパーズ、マルティン・ハイデガー、ハンナ・アレント等の対話論・他者論によって研究を進めた。
- (2) また他の実践領域で「対話」がどのように用いられているかという点に関しては、特に授業におけるアクティブラーニングとの連関で、対話がアクティブラーニングをいかに変えるか、対話によって学校空間がいかに変わるか、その理論的研究と、実際に各地の高校等の「対話型授業」を見学し、また本研究代表者が自ら対話形式の授業を実施することによる実践研究を並行的に行った。これは企業等のマネジメントにおける対話研究に関しても同様であり、企業などで用いられる対話理論(主なものとしてはアダム・カヘンのダイアローグ論、U理論、ティール組織理論他)を明らかにすると同時に、実際の企業の対話型経営に「哲学カフェ」の手法を用いる参与観察をするなど、理論研究と実践研究の両輪で実施した。
- (3) (1)(2)を背景にして、「哲学カフェ」と「哲学対話」の違いに着目し、「カフェ」空間がいかに「対話」の絶対条件になるのか、ミハイル・バフチンによるソクラテス的対話の分析を手がかりにして明らかにした。

4. 研究成果

- (1) 哲学的アプローチにより「対話」概念を明確化するという点に関しては、当初予定していたユルゲン・ハーバーマス、マルティン・ブーバー、カール・ヤスパーズ、マルティン・ハイデガー、ハンナ・アレント等の対話論・他者論に加え、ミハイル・バフチン、デヴィッド・ボーム、ジャン=フランソワ・リオタールの思想を対話理論の大きな柱として導入することにより、対話の空間的・時間的側面を構造的に明らかにすることができた。
- (2) 実践領域における「対話」研究に関しては、まず、対話によって授業を脱構築する可能性を授業論の文脈で明らかにすることができたこと、さらに、対話が「学校」というシステム自体をいかに変えるかを、その理論的研究と実践研究の両面から明確にすることができ

た点が大きな成果である。特に、生徒間および生徒-教師間の対話構造と授業構造の相関関係を明らかにした点、対話の段階と授業のアクティブラーニングの段階が一致することを示し得た点は、従来の教育学の研究に新しい地歩を形成するものであるといえよう。この点に関しては特に、下町壽男氏からの多大な研究協力を得ることができた。氏の協力がなければ、各地の高校でのこれほど大規模な実践研究はできなかった。特に記して謝したい。加えて、本研究は、開始時には予想していなかった大きな成果を二点挙げる事ができた。特筆すべき点の第一点目として、近年世界的な注目を集めている「ティール組織」理論を、対話理論の観点から分析し明らかにすると同時に、ドイツ・ベルリン市にあるティール組織の学校(ESBZ)を実際に訪れ、対話に基づいて営まれる学校空間の実際を論文として広く日本の教育界に知らしめた点を挙げる事ができる。

第二点目は、オープンダイアログと哲学カフェの親和性について本研究が明確にすることができた点である。オープンダイアログ(以下 OD)は、フィンランドで始まった、対話による精神科治療であり、やはりポストモダンの文脈での全く新しい治療としてこの 10 年ほど非常に注視されてきた思想である。この OD の思想と哲学カフェの親和性を「対話」の本質論という視点から構造化し明確化することができた点も、本研究の重要な成果である。

- (3) 最終的に本研究は、「哲学カフェ」の理論化をすることができた点を最大の成果とする。

「哲学カフェ」は 1980 年代にフランスで始まって以来、日本でも広く開催されるようになってきたイベントである。市民同士が腹を割って本音で議論するような、しかも立場の違いを越えて対等に向き合うような場は日本の文化の下ではなかなか存在しない。その本音の議論がなされるカフェが開催されるようになってきた背景には、言挙げを非とする文化的背景に対する閉塞感もあれば、対話を求める時代の流れもあるだろう。その過程で市井では哲学カフェが増え、学校の中でも授業として「哲学対話」が取り入れられるようになってきた。だが、そこでなされる「対話」は往々にして真の対話ではない。

それでは「哲学カフェ」とは何か。また、「対話」とは何か。

この問題を、本研究では「哲学カフェ」と「哲学対話」の違いに着目し、「カフェ」空間がいかにか「対話」の絶対条件になるのか、ミハイル・バフチンによるソクラテス的対話の分析を手がかりにして明らかにし、さらにユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション論を梃子にして構造化した。その際、重要になるのが「主体化」の概念である。カフェの空間による既存の「世界」の解体と、「主体化」(植民地化)されてしまった現存在の対話による解放(真の主体の取り戻し)、という二つの契機が哲学カフェの根底にある点はまさにハーバーマスのコミュニケーション論の構造と重なるものである。このような前提において、哲学カフェはまさにポストモダンの系譜に連なるものであり、同時に、ポストモダンの隘路である「漂流」を、「越境する空間性」(これこそカフェの「自由」を保障するものである)における連帯によって超克していくものであると位置づけることができる。そしてまさにこの連帯する自己超克こそ「真の対話」として現象する相互主観的行為なのである。こうした哲学カフェの理論化と同時に、哲学カフェの持つ思想史的位置価値を明確にすることができたのは本研究を嚆矢とするものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

五十嵐沙千子、対話による共同体 – ティール組織の学校、倫理学、査読無、2019、掲載頁未定

五十嵐沙千子、バフチンの対話 / 対話としての詩学 – オープンダイアログ(Open Dialog)の背景にあるもの、哲学・思想論集、査読有、44 巻、2019、33-50

五十嵐沙千子、ハイデガーのニーチェ、倫理学、査読無、34 巻、2018、23-42

五十嵐沙千子、世界からの下降、哲学・思想論集、査読有、43 巻、2018、39-53

五十嵐沙千子、現成する内臓秩序 – デヴィッド・ボームにおける対話的 / 物理学的アプローチ、倫理学、査読無、33 巻、2017、21-46

五十嵐沙千子、対話である越境 – オープン・ダイアログ、討議理論、あるいは哲学カフェの可能性をめぐって、哲学・思想論集、査読有、42 巻、2017、46-64

五十嵐沙千子、反復と伝承、倫理学、査読無、32 巻、2016、31-46

五十嵐沙千子、中等・高等教育における対話型授業のあり方をめぐって、哲学・思想論集、査読有、2016、41 巻、19-41

五十嵐沙千子、コーチングにおける教師と生徒の関係、教育と医学、査読無、7 月号、2015、578-589

五十嵐沙千子、O.S.ウォークアップにおける「主観」の復権、倫理学、査読無、31 巻、2015、1-17

五十嵐沙千子、他の主体、哲学・思想論集、査読有、40 巻、2015、57-73

〔学会発表〕(計 3 件)

五十嵐沙千子、ワークショップ、哲学カフェについての哲学カフェ、日本倫理学会、2017、於弘前大学

五十嵐沙千子、対話である越境、筑波大学哲学・思想学会、2016、於筑波大学
五十嵐沙千子、ワークショップ、高等教育現場での授業実践についての哲学カフェ、日本倫理学会、2015、於熊本大学

〔図書〕(計4件)

- 1 石原孝二・斎藤環編、五十嵐沙千子、他4名、オープンダイアログの空間-哲学カフェ、『オープンダイアログの哲学』、東京大学出版会、2019 刊行予定、頁数未定
- 2 前川修一・梨子田喬・皆川雅樹編、五十嵐沙千子、他12名、そもそも「教える」とは、『歴史総合と世界史探究・日本史探究を教える-歴史教育「再」入門』、清水書院、2019 刊行予定、頁数未定
- 3 ひつじ書房編、五十嵐沙千子、他8名、哲学カフェから考える「学校で考える、議論する、対話することを教える」ことの可能性、『新科目「公共」を考える』、ひつじ書房、2019 刊行予定、頁数未定
- 4 五十嵐沙千子(単著)、この明るい場所-ポストモダンにおける公共性の問題、ひつじ書房、2018、271

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：下町 壽男

ローマ字氏名：SHIMOMACHI Hisao

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。